

# 学校教育における教師の役割

兵庫県立須磨友が丘高等学校長 河合 隆廣

はじめに

私の所属する須磨友が丘高等学校は神戸市の西方、須磨区にあり、六甲山系の緑豊かな丘に建ちます。校舎から源平合戦で有名な須磨の浦、一ノ谷を眼下にして、瀬戸内海、淡路島、明石大橋を一望することができ、春から夏にかけては鶯が囀る自然環境に恵まれた学校です。

平成14年度に普通科から総合学科に改編しましたが、本校のめざすところは、現代の高校教育に対し真摯に取り組むことです。昨今より大学受験の技法のみに重きをおいた高校生活を過ごすことにより、大学に入ってから学ぶ意欲を無くす学生が多いと問題になっています。本校は普通科時代の偏差値偏重主義から脱却し、総合学科として「自分探しから進路を見出す」教育を展開しています。高校時代の多感な時期に「どのように生きるのか？」を問いかけるなど、社会を見据えた進路指導プログラムを構築しています。

平成17年度、私は須磨友が丘高等学校長として着任し、総合学科開設4年目にして複雑な教育課程を抜本的に見直しました。平成18年度入学生から新教育課程を実施し、確かな学力をつけながら生徒の進路に適応した選択を可能にした取り組みをしています。活力のある学校創りを提唱し、生徒指導面や学力向上面でも着実に成果を挙げています。

私の約38年間の教職生活は、学園紛争の正常化、国際経済科や国際ビジネス科の開設、総合学科の改編等、学校改革の実戦部隊として生きてきたように思います。学校改革の手法としては、学力をつけることが大前提ですが、魅力的な教育課程や教育内容の構築、教職員の資質向上であり、入り口における広報、出口における進路実現などがあげられます。

今回は教職をめざす皆さんに、「学校教育における教師の役割」（敢えて、教師という言葉を遣います）についてお話ししたいと思います。教師としてどうあるべきか、学校教育で最も大切なことは何かを提起しながら、家庭教育と学校教育の違いについても触れ、総合学科教育を紹介し、本校教育がねらいとしていることを述べます。これにより、皆さんが残りの大学生活を有意義なものとし、自分自身をより質の高いものへと磨かれ、日本の教育界を支えて戴きたいとの想いで筆を執りました。

## 1 「先生」を何と読むか

皆さんは「先生」と呼ばれたことがありますか。大学生でも教育実習に行き、生徒から「先生」と呼ばれると、何か自分は急に偉くなったような気がしてきます。私は必ず、彼らに「先生と書いて何

と読みますか？」と尋ねます。すると、ほとんどの人が「先に生まれる。」と読みます。「それでは先生になりません。『先を生きる』と読みます。先生は、常に生徒より一步先を生きなければならないのですよ。」と諭します。しかし、現実には教員になっても教科の研究はするのですが、案外、「教育」についての勉強は疎かにしているのではないかとされます。

自分はそんなに立派な人間ではない、と言う人もいるでしょう。しかし、自分が足りないと思っている人の方が、教師として相応しいのではないかと思います。自分が至らないと思うからこそ、生徒から学ぶこともあり、謙虚に努力することができるのではないのでしょうか。なかには、「俺は誰にも負けない。」という傲慢な人もいますが、逆に救いようがありません。そのような人は自己中心的で自分の考えを人に押しつけ、得意な分野で鼻に掛け、うまく行かないと人を批判し、人の話を聴こうとはしません。それでは人間としても成長が望めなく、教師としての力量にも疑問を感じます。

大切なことは、常に教師自身が「いかに生きるべきか。」を問いかける姿勢にあるのではないのでしょうか。問いかける自分があって、初めて人として教育ができるのではないかと思います。当然、教師も自分の生き方に答えを導き出すことの難しさを感じるはずです。

英語、国語、数学……、どの教科を担当しても、教科を通して生徒に「生き方（人生という目標への行き方）」を教えなければなりません。教師の生き方は学校行事、部活動、日常の生徒の指導のなかで教えとして示し、授業のなかでも姿勢としてにじみ出るものです。日常の生徒と挨拶を交わすなかで、気になる生徒には必ず声を掛けるようにしています。若い先生には「いい授業がしたければ、廊下にあるよ。」と教えています。声掛けは生徒との信頼関係を深めるからです。なかには、挨拶なんか別に教育に関係ないと声掛けもしない教師もいますが、そんな人にいい授業ができるわけがありません。生徒は信頼していない教師の言うことなど聴かないでしょう。

その意味で、教職をめざしている皆さんには、教育の指針となる自分なりの哲学（座右の銘）を持つことをお勧めします。それは羅針盤のようなもので、自分の教育をどのように展開するべきか、どのように生徒たちに関わっていくべきかの基準になるし、生徒を受け止める大きな度量にもなります。私は論語にある「忠恕<sup>ちゆうじよ</sup>」という生き方を大切にしていますが、生徒の善いところは大いに褒め、間違ったときにはしっかり諭してきました。厳しく指導しても、生徒個々を見捨てず、分け隔てなく愛情を注げば必ず生徒は変わります。

## 2 学校教育で最も大切なこと

学校教育が果たすべき役割とは何でしょうか。戦後の日本は、経済の高度成長により優秀な人材が求められ、高等教育に力を入れてきました。いつの間にか、大学受験戦争といわれるように小さな頃から学習塾通いが過熱化し、いい大学に進学することが人生の目的であるかのような風潮になっています。高校もそれに応えようと、大学進学実績のみを追いかけ、教師が発する言葉も受験テクニックに偏ってしまいがちです。本校も学力向上プログラムを組み、大学進学のための学習体系を構築しています。しかし、本校は大学卒業後の生き方を見据えた教育に重きをおいています。学校教育でも最も大切なことは、生徒が「自立」に向けて自分の可能性を見つけていく教育を展開することだと信じています。

早稲田大学理工学部教授の加藤諦三氏が『若者の自立を考える』の論説のなかで、学校が何をなすべきかを的確に指摘されていますので紹介します。

「私はそれぞれの発達段階によって、クリアすべき課題があると考えています。大きくりに言うなら、私は幼児期～少年・少女期には『コミュニケーション能力』、青年期には『アイデンティティ』、中年期には『社会的責任』、老年期には『老成』が最重要課題と考えています。自立とは、すなわちアイデンティティの確立であり、それは青年期の最重要課題であるといえるでしょう。ポイントは現在の課題をクリアできた人のみが次の年代の課題に取り組める、というところにあります。」「さらに注意すべきは、その年代の課題を解決していなくても、その年代は生きられるということです。しかし、次の年代は生きられません。」「自殺は極端なケースにしても、何らかの心理的破綻や社会的破綻は避けられないと考えるべきです。このように考えてくると、学校現場で取り組むべき課題も自然と見えてくるような気がします。高校の先生方にとっては、生徒が高校時代をどう生きるかはもちろん重要でしょう。進学準備、就職準備も欠かせないでしょう。しかし、それだけになってしまうと、生徒が数年後に行き詰まる危険性は高まります。高校時代を終え、生徒が次の年代に入った時、彼らとその年代も生きていけるような教育を高校時代に行わなければならないのです。」

さらに、加藤氏は次のようにも述べています。「現在、高齢者問題が深刻化しています。高齢者の問題には、本人がこれまで生きてきた長い道のり、そのすべてがのしかかってくるという厳しさがあります。ある著名な精神科医がこんなことを言っています。『悩みは昨日の出来事じゃない』。悩みは、昨日今日の出来事ではなく、本人が生きてきた人生すべての結果であるという意味です。中高年の悩みは中高年期の悩みではなく、幼年期や少年・少女期、青年期を通じてクリアし損ない、積み重なってしまった問題なのです。その点を意識すれば、生徒との向き合い方も、自ずと変わってくるのではないのでしょうか。」

幼少期における「コミュニケーション能力」とは、相手の表情や場の空気を読んで理解する感性と、相手の立場に立って自分の感情や意思を伝え、信頼関係を築いていく能力です。そして、青年期に求められる「アイデンティティ」とは、同一性、所属意識の意で、自分の存在が何らかの形で社会の役に立っているという成就感をいいます。私たち教師は、現在関わっている生徒のみを教育の対象としていますが、課題をクリアできずに積み重ねてきた親も多いように思います。親が自立できていない家庭で育った生徒は、当然多くの問題を抱えていることになります。それだけに、生徒が次の世代に入った時に、彼らとその年代もしっかり生きていけるような教育を行うことが、いま学校に求められていることなのではないのでしょうか。その意味で、教師自身も“自立する”ということに自覚を持たねばなりません。

### 3 総合学科高校の教育

「私たち教師はいろいろな動機付けをしますが、生徒は生き方を見つけると自ら進んで学び、すごい力を発揮するんですよ。その時は本当にやり甲斐を感じますね。総合学科高校には、生徒と教師が向き合って生徒の“夢”や将来の進路を語り合う授業があります。生徒一人一人が自分の生き方を見つけるためには、それだけ真剣に思考し合える土壌がなければなりません。高校時代はコミュニケー

ション能力を身に付け、アイデンティティを形成していく大切な時期です。大学受験のための基礎学力を付けることは決して疎かにしてはなりません、さまざまな人との出会いや社会体験を組み入れた学習体制が必要です。

総合学科高校には、原則履修科目として1年生で『産業社会と人間』という授業があります。学習内容は豊富で社会人講話や社会体験を行います、社会人講話ではふだん会うことのできない大学教授や企業のトップ、国際社会で活躍しているの方々との出会いがあり、夢をどのように実現されたかを学ぶことができます。職場体験では、企業を通して現代の社会の動向を知り、社会で何が望まれているのかを知ることができます。

3年の『課題研究』では、大学の卒業論文のように、全員が個人テーマ研究に取り組み、論文作成やプレゼンテーションを行います。課題研究に取り組んでいる生徒たちの姿勢は真剣そのもので、「大学で学びたいことが明確になった。」「自分が学びたい課題に取り組むことができた。」「学習意欲が高まった。」と、前向きに答えてくれます。人の話を聴き、レポートにまとめる。フィールドワーク（現地調査）で、さまざまなデータを分析する。専門書を読み、自分の考えを整理して人前で発表する。そのなかで、彼らは大きく成長していきます。

私は『産業社会と人間』を、不易流行（産業社会＝流行、人間＝不易）と読んでいます。「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」というように、国際化や情報化などの社会の変化に的確かつ迅速に対応していく教育を展開するとともに、時代を超えて変わらない普遍的価値、即ち心の在り方を追求する学びが必要です。感受性豊かな高校時代にさまざまな社会体験を行い、多くの異なった世界の人との出会いを通して感動し、人生にはいろいろな生き方があることを認識する……自分の存在が何らかの形で社会の役に立たせようとするアイデンティティを育むことが大切です。生徒が「短い」もの差して人生を考えていたら「長い」展望を示してやり、「狭い」見方をしていたら「広い」視野を示してやる。そして、人として「大きく」育ててやる。この「長い」「広い」「大きい」見方や考え方を提供し、サポートすることが教師の役目です。

高校時代には、生徒一人一人が、社会でリーダーとして活躍するための資質・能力を身に付け、いかに社会が変化しようと、先を見通す力を持って自ら学び行動し、心正しく、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成する教育を展開するべきだと考えています。

#### 4 人生成功の方程式

以前に(株)アシックスの創設者である鬼塚喜八郎氏の講演を受けたことがあります。そのなかで、「人生成功するためには次の方程式がある。」と教えて戴きました。

$$\text{成功} = \text{能力} \times \text{生き方} \times \text{情熱}$$

「能力」には、学校で学んだ知識の他に、経済や法律などの実学的な能力もありますが、その人の個性や積んできた経験なども含まれます。

「情熱」とは努力をいうのですが、絶対成し遂げるといふ根気強さや行動力も含まれます。いくら能力があり善い考え方をしている、行動に移さねば成功することはありません。

「生き方」は、3つの要素の中でもプラス（善い）方向に向かうか、マイナス（悪い）方向に向かうかという最も重要な基準になります。成功の方程式は掛け算であるだけに、能力や情熱が高くても、悪事に進めばとんでもないことになります。

最近、企業のリスク管理の観点から、コンプライアンス【compliance】問題が大きく取り上げられています。本来は「法令遵守」という意味ですが、企業活動において社会規範に反することなく、公正・公平に業務遂行することをいいます。耐震偽装や原材料偽装等が大きな社会問題になっていますが、コンプライアンス違反を起こせば、世間から信頼を失墜し、倒産という社会的制裁を受けることになります。したがって、いまは「他人に批判されるから」というネガティブな捉え方ではなく、積極的にルールを守り、人のため、社会のために生きていく、誠実な企業行動が企業の「無形のブランド価値を高める」というポジティブな捉え方がなされています。

人の生き方も同様で、成功するためには前述した「アイデンティティ」を確立することです。即ち、生徒が、社会や人のために自分の持っている能力や個性を役立てようと生きることであり、社会のなかに自分の帰属性・同一性を模索しようとする試みをいいます。自己中心的で社会に背を向け、善悪の区別が付かず、傲慢、偽善、嫉妬、怒りなどの感情的な言動をしていれば、当然争いごとやめごとが絶えず、社会から排除される人生を歩むことになります。ライブドアの堀江貴文前社長のよう、どんなに名声や地位を得ても、大金を得ても、コンプライアンス違反を起こせば奈落の底に突き落とされてしまいます。昔は正直者はバカを見られると言われてきましたが、正しいことは正しい、間違ったことは間違っていると見える人間を育てることが大切ではないでしょうか。したがって、人として幸せに生きるということは、社会のため、人のために自分が役に立っているという喜びにあります。成功の秘訣は人に対する思いやりを持つことであり、誠実に生きること、公正・公平な考えで責任を持って行動できることではないでしょうか。

## 5. 学校教育と家庭教育との違い

家庭教育も学校教育も、子どもの自立を確立させることを目的としています。家庭教育は、当然、学校教育よりも子どもへの関わり方が強いものです。ところが、「自立」とは、子どもが親から離れ、自分で生きていくことをいいます。

「家庭」は、子どもに最も深い愛情を注ぐ、安心できる居場所です。親が子どもを公正・公平に育て、自立する基礎をしっかりとつくってあげれば、学校でさらに大きく成長し、社会に貢献できる自己を必ず見つけます。このように、親の本来の役目は躰です。

ところが、近年、家庭教育力の低下を感じます。いまの親は幼少期から子どもを甘やかし、「子どもは勉強が仕事だ。」と教え、家の手伝いをさせていません。家庭で挨拶や家事の手伝いをしなくても、親は無条件で食事を作ったり、好きな服を買ったり小遣いをやります。高校に進学して義務教育が終わると、子どもの「学校を辞める。」という言葉に脅され、子どもの言いなりになる親もいます。単車を買ったり、タバコを吸っていても注意できない親を見かけます。まさに甘やかしの構図です。その一方で、最近では家庭自体が崩壊している例を見かけ、子どもを全く放任している親も多く見かけます。モンスターペアレントと呼ばれ、社会常識も通じない親まで出現しています。“自立”を意識

しない親のもとで、親離れできない子ども、子離れできない親が多いように思います。親自体が自立できていなければ、当然子どもも問題を抱えていることになります。

ところが、社会にそのまま出たらどうでしょう。自己中心的で挨拶もできず、働きもしなければ、誰からも評価されず、当然その社会から排除されることになります。社会が悪い、誰々がいけない……と批判しても、そのほとんどが自分の言動に問題がある場合が多いのです。

そこで、学校は家庭と社会の間に位置し、社会で活躍する人財を育てる重要な役割があります。生徒が生き方を間違えていれば、真っ直ぐ、大きく育つように修正してやらねばなりません。それを全て教師が修正せよというのではなく、学校行事や部活動という集団活動を通して仲間から学び、してはいけないこと・しなければならないことを学んでいきます。その点、生徒会や部活動を続けている生徒は、その活動のなかで多くのことを学びます。家庭で育っていない分は、学級役員、日番や清掃当番などの責任を果たす習慣をつけ、正義感や忍耐力、思いやる心の育成など、学校で育てなければならないことが多くあります。

しかし、最近は学校でも「個性重視」「自主性の尊重」の旗印をもとに、何でも自由がいいのだと、教え込むことをしない教育を展開しているところがあります。それでは、人としての心は作れません。我が儘なまま社会に出て行くことにもなります。ある意味で高校は最後の砦であり、教師は生徒が超えねばならない壁になることも必要なのです。生徒がその壁を超えた時に、社会に役立つ自分を見出すことができるのです。それが“自立”ではないでしょうか。

一般的に日本の保護者は、子どもを学校に預けて、学校に全人的な教育を求める傾向があります。ところが、自分はどうかというと、学校の教育には無関心であり、全人教育という家庭は為すべき責任を負おうとしません。日本は決して成熟社会とは言えません。

そこで、私は入学式の式辞で、保護者に対して必ず次のように言っています。

「本日よりお子さまを預かりし、教職員一同、全力を尽くして生徒の育成に当たる決意を申し上げます。一方で、保護者の皆様にお願ひ致します。学校では教職員が保護者に成り代わり教育して参りますが、ご家庭におかれましては須磨友が丘高校の生徒としてお預けいたします。」と、家庭が本校の生徒として育てる責任があることを指摘しています。そして、下記の『人を大切にする教え』（幸せに導く法則）の用紙を配布し、親や教師が共通の認識のもとに、子どもをどのように育てるべきかがわかるようにしています。

一方、ここでは例示しませんが、生徒用に『自分を大切にする教え』（幸せの法則）を作って教室に掲示し、生徒自身が「自分創り」をする基準にさせています。

#### 教師・保護者用 『人を大切にする教え』（幸せに導く法則）

- 一 甘やかしや放任で育てると、子どもは人の気持ちに鈍感で孤独になります
- 二 不平・不満を聞かせて育てると、子どもは人を嫌い批判するようになります
- 三 敵意や憎しみに満ちた中で育てると、子どもは誰とでも争うようになります
- 四 感謝して育てると、子どもは前向きで意欲を持って取り組むようになります
- 五 励まし褒めて育てると、子どもは自信と勇気をもつようになります

- 六 責任感を育てると、子どもは自分で考えて行動するようになります
  - 七 正義感を大切に育てると、子どもは純粋な心と真理を見抜く力をつけます
  - 八 信頼して育てると、子どもは思いやりをもって行動するようになります
  - 九 愛する環境で育てると、子どもは美しい心で人を大切にする心を育みます
  - 十 先のことを考えて行動させると、子どもは自分の行くべき道を見つけます
- ※ 笑顔で子どもに接すると、子どもは笑顔で心を返してきます〔感謝〕

## 6. 「あいする」教育の推進

本校では、私の生徒育成の集大成として『あいする』教育を展開しています。本校が位置する神戸市須磨区友が丘が「友愛・隣人愛」を理念として開発された地であることから、『愛する』を教育のスローガンにしました。この『あいする』は、私自身が、学園紛争の正常化や学校改革のなかで、実際に生徒と関わるための指導基準にしてきたことです。

『あいする』教育とは、「自らを愛し、人を愛し、社会を愛すれば、社会からも人からも愛される自分ができます」と、愛される自分を創る教育展開をいいます。しかし、人から愛される自分を創りなさい、といっても簡単にできることではありません。いまの生徒に「君の善いところはどこだ？」と聞いても、「わかりません。」と答える生徒が多いことに驚きます。親にも「子どもの善いところを10個挙げてください。」と尋ねますが、案外答えられません。どうも日本の親は、日常から怒りはしても、子どもの善いところを褒める教育をしていないようです。

そこで、『あいする』の4文字の1字毎に意味を持たせています。『あ』はありがたいの気持ちで明るくあいさつをする。『い』はいのちと思いやりを大切にする。『す』はすなおに人の話を聴き、誠実に行動する。『る』はルール(約束)を守り、マナー(心遣い)を身に付ける。これなら、やろうと思えば誰でもできることです。それを続けていけば、必ず人から愛される自分ができると説いています。

そのことは、教師にとっても心掛けなければならないことです。学校を良くしたいと思うなら、「明るい挨拶が交わせる学校をつくりなさい。」と言っています。一般的に、挨拶は小・中学校でできていても、高校ではしなくなります。高校が駄目だというわけではありません。それは青年期の自我のめざめが一因だと思います。小・中学校時代は自発的な挨拶ではなかったということです。高校では自分創りのなかで、挨拶は重要な意義を持っています。大人としての挨拶は「自分の存在」を自己主張することと、「相手の人格」を認めるということの二つの意味を含んでいます。即ち、「自分を大切にしてください。貴方を大切にしますよ。」というシグナルなのです。教師の声掛けは、一人の人間として生徒を認め、愛しているという意思の表現なのです。したがって、教師と生徒が互いに挨拶を交わさないということは、互いに相手を認めていないという意思表示にもなります。生徒が学校で活かされていないければ、挨拶を交わし合える環境はできないということです。教師が生徒を大切にしている土壌があれば、明るく挨拶を交わせる学校ができているということです。

このように、明るく挨拶を交わせる学校ができているれば、生徒は人の話を素直に聴く態度を備え、誠実に行動するようになります。教師が生徒一人一人を社会で活躍するように育てれば、生徒はルー

ル（約束）を守り、マナー（心遣い）を身に付け、責任をきちんと果たそうとします。教師が生徒を褒めて伸ばそうとするなら、生徒はやる気・意欲を湧かせ、自己の能力を向上させようと努力します。生徒は自分が愛されているか、愛されていないかについては非常に敏感です。本当に愛されていると感じれば、必ず教師を信頼して何ごとにも真摯に取り組もうとします。したがって、学力向上を図ろうとするなら、教科の技術的な改善や教育機器の活用も大切ですが、まずは生徒と教師が互いに感謝し合える信頼関係を構築することが先決であることを忘れてはなりません。人権教育で命と思いやりを大切にする教育を展開したいなら、どうすれば挨拶をし合える学校ができるかを考え、きめの細やかな温みのある学校環境創りに励むべきです。

しかし、なかには優しさを前面に出しているからと、ルール違反をしている生徒に対して全く注意をしない教員もいます。それは生徒を『自立』させるという使命を自覚していない証拠で、単に指導を放棄しているに過ぎません。教師としての真の優しさとは、生徒の言いなりになるのではなく、厳しくとも生徒一人一人と真正面から向き合ってやることです。生徒の生きる方向は当然自由ですが、人としての生き方がぶれそうな時に、教師は正しく歩めるように修正する役割を果たすべきです。生徒の行動に目を向け、「是は是、非は非」と毅然と対応し、善いところは大いに褒め、駄目なときには叱り、大きく育ててやることです。

ただ、頭ごなしに怒れば、聴くものも聴かなくなります。どうせ言ってもわからないと見捨てれば、口は丁寧でも生徒はその本音を読み取り、自分の殻から出ようとしなくなります。注意するポイントは、壁にボールを当ててキャッチボールをするようなものです。思いっきりボールをぶつけると何処に飛んで行くかわかりませんし、緩く投げればボールは返ってきません。壁の状況を読みとり、目標に向けて心を込めて投げれば必ず手元に返ってきます。生徒のプライドを傷つけないように配慮もしながら、何とかしてやりたいという愛情を持って指導することです。生徒が「真に、自分を大切にしてくれている。」と感じたときに、自他を愛し思いやる心が育つのではないのでしょうか。

## まとめ

現代は国際化、高度情報化、科学技術の進展、少子・高齢化、核家族化、さらに所得格差が拡大するなど、社会の変化は激しく、学校を取り巻く環境はますます厳しくなっています。そして、ここ数年、学校はいじめ問題で揺れ、日本の各地で安易に人を殺害する事件が相次いで起こり、人の命の大切さが疎かにされています。このような現実を見るにつれ、家庭の教育力の低下と学校における教員の自信の無さを痛感せざるを得ません。先行き不透明な時代には、いままでに経験しなかったことがいつ起こるかわかりません。教育の場で失敗は許されないだけに、教育者としての土台がしっかりしていなければ、その度に揺らいでしまいます。どんな場合でも、教師は常に冷静でなければなりません。一度でも感情的な言動をとったら負けです。難しいときほど、笑顔で対処できる自分を創ることです。何事も常に生徒を起点として判断し、指導に行き詰ったら前掲の『人を大切にする教え』（幸せに導く法則）を参考にしてください。きっと指導の方向が見えてくると思います。

最後に、これから教職をめざす皆さんに、教師としての喜びを知ってほしく思います。

まずは、教師という職のすばらしいところは、数多くの生徒たちの人生に関わることができるとい



うことです。高校時代は一生涯の骨組みを作る大切な時期ですから、生徒の生き方に大きな影響を与えます。人生の一人の先輩としての生き方が生徒に共感を受け、大きな影響を与えることができるとしたら光栄なことです。たった3年間の出会いですが、卒業生が社会でリーダーとして活躍し、自分の教えを紐解いてくれている姿を観たときは教師冥利に尽きます。問題を抱えていた生徒が親となり、立派に子どもを育てていることを知れば嬉しい限りです。自分の生き方が教えとなって、場所を変え、世代を超えて生きていくのです。

それだけに、教師個人としても、常に一人の人間としての成長があります。この時代、指導の困難や挫折に突き当たることもあるでしょうが、愛情を持って乗り越えればすばらしい心が備わります。教師は「教職の道」を通して、自分自身が「人として生かしてもらっている。」のです。私は生徒を通して教えられたことが多かったように思います。その意味で「生徒に教えてやっているのだ。」という傲慢であってはならず、常に謙虚と感謝の心で教育に携わることが大切なのではないでしょうか。

教師の思いは、いつも明るくいきいきと学び、社会に貢献しようと真っ直ぐに伸びていく生徒を育てたいということです。もしも、自分が理想とする教育を展開することができたなら、他の職業では決して得られない充実感があります。一人の人間として社会に役立つ仕事ができたと喜びと、教職の道に進んでよかったとの確信が持てます。「理想の学校なんかできるわけがない。」と、はじめから何もやろうとしない人は確かに多いです。しかし、実行しなければ、実現するわけがありません。「生徒と気持ちを分かち合える、そんな教育をしたい。」との思いが強ければ、いつかきっと自分の思い描く学校が実現します。それがステップとなって、また次の学校創りの目標ができます。その姿勢を持ち続けていると、いつか大きく成長している自分に気付くことでしょう。私はそんな経験ができました。

ぜひ、教職をめざす皆さんには、日本の将来を担うすばらしい人財を育む教育者になる、という自負を持って頑張って戴きたい。そのために、皆さん自身が『自立』を意識した取り組みをしてほしいと思います。人として大きく、広い視野で、かつ長いスパンの人生観を持てるように、今のうちに本を読み、多くの人との出会いやさまざまな経験を積み重ねてほしいと願っています。

最後になりましたが、今回、甲南大学教職教育センター年報の紙面をお借りし、私の経験を通した想いをお伝えする機会を与えて戴きましたことを厚くお礼申し上げます。

参考文献：「キャリアガイダンス」2006年7月号（No13）（株）リクルート

執筆・投稿日 2008年2月13日現在